

いのちの葉

知恵と智慧

徳永一道

目次

最後の依りどころ	4
私一人にとどまらない救い	9
南無阿弥陀仏というほとけ	14
仏の心は大慈悲の心	19
「この私一人」のため	24
「私から」でなく「如来から」	29
排除を超える道	34
仏教が教える大切なもの	38
知恵と智慧	43
苦悩の私のために	48

最後の依りどころ

慈光はるかにかぶらしめ　ひかりのいたるところには
法喜をうとぞのべたまふ　大安慰に帰命せよ

親鸞聖人「浄土和讃」（国宝本より）

和讃に自筆で註釈

親鸞聖人は多くの和讃をつくられたことで知られる。それもすべて七十歳代後半以後の晩年のものであつて、「正像末和讃」にいたつては、

「愚禿親鸞八十五歳書之」

の奥書があり、生涯につくられた和讃の数は、なんと五百数十首を数えるのである。

聖人の和讃は、後に文明年間に、蓮如上人によつて「正信念仏偈」とともに「三帖和讃」として開版され、広く一般に流布することになった。

さて、聖人の和讃にきわめて特徴的なものは、「ご左訓」あるいは「お左仮名」と通称される一種の語義・註釈で、それによつて聖人独特の奥深い法義の理解をうかがうことができるのである。

広く一般に流布した、いわゆる文明版和讃は版木印刷という制約があつて、

原本の左訓が省略されることが多いが、高田派専修寺せんじゆじに伝えられた通称「国宝本」の和讃には、聖人の付された左訓がそのまま残されている。興味深いことは、和讃の本文は門弟に書写させて、左訓はご自身の手で書き入れられたものがあるという事実である。

本書では、ご和讃に付けられた興味深い、また法義の核心をつくようなご左訓を紹介して、聖人の意図されるところをうかがってみたいと思う。

憂いや悪を超えて

今回の和讃は「讃阿弥陀仏偈和讃」の一首で、この「大安慰」という語に付された左訓（原文は片仮名）には、

だいあんいはみだのみななり 一さいしゆじやうのよろづのなげき
うれえわるきことをみなうしなふてやすくやすからしむ

とある。阿弥陀如来の名号は、「一切衆生」すなわち「この私」の悲しみや歎なげきを除いてくださるはたらきがあるということであろうか。

人間としてこの世に生を享うけた限りは、自らの人生につきまとい離れない「歎き」や「憂い」や「悪」のただ中に身を置くということであろうが、如来の大悲の象徴である「南無阿弥陀仏」の名号は、それを超えてこの私にはたらしき続けているのである。

この大悲のはたらきを知らされる時、それが煩惱のただ中に生きていかざる